

2023年1月22日 降誕節第5主日礼拝

メッセージ「大いなる光」

岡嶋千宙伝道師

聖書 イザヤ書 9章 1-4節

新年を迎えて 4 週目に入りました。わたしは、昨年 of 年末から今年 of 正月にかけて、3 日以外は仕事で、その後も、仕事三昧で普段と変わらず。ということで、まさに「光陰矢のごとし」。元旦礼拝がついこの前なのに、気づいたら 1 月も後半で、あっという間に 2 月突入という勢いです。みなさんはこの新しい年、どうお過ごしでしょうか。日本のカレンダーでは、クリスマスの後に正月が来て、3 日以降は普段通りの日常に戻っていきます。教会には別のカレンダーがあって、その暦、教会歴によれば、今はまだクリスマスの続きです。業界用語で、「公現節」と呼ばれるこのとき、教会では、神が人となって生まれたこと、そしてその神の子であるイエスが、わたしたちと同じようにこの世に生きたことを覚えて礼拝を守ります。その公現節の主日に与えられた御言葉。「闇の中に光がある。光が輝く」……。マタイ福音書にも引用されているもので、馴染みのある言葉かもしれません。とても印象深く、心に残ります。力強く大いに励まされます。たとえ苦しくても、しんどくても、必ず良き日が訪れる！ そう思いたくなります。だけど、新しい年を迎えてから今まで、あるいはここ数年も含めて、特に昨年から続く今に至るまで、わたしたちの生きるこの世界の現状を踏まえると、そんなに単純ではないと思えてきます。不穏な空気が漂い、ぬぐい去ることができない今の世の中。クリスマスから新年は祝いと休息の時期でありながら、止むことのなかったウクライナとロシアとの間での武力衝突。宗教原則を理由にして、女性の権利の抑圧が続けられ、抵抗する人たちが次々と弾圧されているイランやアフガニスタン。大統領選挙の結果に満足できなかった反政府勢力が国会・大統領府・最高裁判所に押し入ったブラジル。ユダヤ人国家樹立のために、パレスチナの人たちの住居、生活、さらに命までも奪っているイスラエルの極右政権。そして、コロナ禍、あるいは、これらの国際状況の影響により、ますます多くの地域で、日本を含めてますます広がっていく社会格差。各地で様々な対策がなされてはいるけれど、いずれも、抜本的な解決には至っていません。今、礼拝に集い、暖房の効いているこの部屋で語っているわたしは、まだ、何とか生き、そして、様々な恩恵を受けています。ですが、忘れてはいけません。今、このとき、まさに闇のような、死の陰に生きる人たちがいること。心が痛みます。なんとかしなければと思います。でも、どうすれば良いのか。神の光は、本当にこの世界を輝かせてくれるのだろうか。

本日の御言葉が語られたのは、紀元前 740 年頃の中東パレスチナです。当時、その地域を取り巻く国際状況は、かなり緊迫していました。パレスチナの北東部、メソポタミアには、アッシリアが台頭し、勢力拡大のため、パレスチナ地域にも進行を始めていました。他方で、それに対抗する南の国エジプトがあり、古代イスラエルの王国を含めて、その地域にあった国々は、南北から二つの大国の圧力をひしひしと受けていました。特に、アッシリアは、敵対勢力を徹底的に壊滅させるという

帝国主義的な政策を取り、急速にその領土を拡大させていました。アッシリアによる攻撃が目前に迫っている。その軍隊の足音がすぐそこに聞こえる。実際、もともとはイスラエルの人々がすんでいた土地の一部が、アッシリアによって破壊され、そこに住んでいた人々は故郷を捨てて別の場所へと移住させられる、ということが既におきていました。当時の状況を、イザヤは、本日の箇所より少し前で語ります。「地を見渡すと、見よ、苦難と闇／苦悩に満ちた暗黒、そして追放の暗闇」(8:22)。そんな状況で語られる神の言葉「闇の中に光がある」「死の陰が覆う地に光が輝く」。状況は変わる。しかも劇的に。何もかもが今の状況とは正反対になる。「闇」は「光」に。「陰」は「光」に。「苦難や苦悩」(8:22)は「喜びや躍り」(9:3)に。そして「追放」(8:22)は「定住／解放」に。2-4 節を見ると、この劇的な変化は武力、あるいは軍事力によってもたらされるのだと思います。分かりやすいところでは、2 節の「戦利品」、4 節の「兵士の靴」「血にまみれた服」というのは、まさしく軍事と結び付くものです。あるいは、3 節の「ミデヤンの日のように」というのもそうです。かつて、この箇所よりさらに 400 年ほど前、イスラエルの人々が外国勢力によって虐げられていた時、神によって立てられた指導者ギデオンのもとで、敵国であるミデヤンを軍事的に打ち破り解放をもたらしたのですが(士師記 6-8 章)、ミデヤンの日というのは、そのことを想起してのことです。確かに、この後、アッシリアは勢力を弱め、別の国によって滅ぼされることになります。ですが、この言葉が向けられたイスラエルの人々の生活が、それによって改善されたかという、そうではありません。一時的には良くなったように思えたとしても、長い目でみれば、決してそうではありませんでした。この時期から 150 年後、古代イスラエルの王国は完全に崩壊し、イスラエルの人々はそれまで住んでいた土地を失うことになります。軍事的な勝利、武力による変革は、光をもたらさないのです。では、いったい何が「光」をもたらすのでしょうか。

鍵となるのは 4 節です。先程も少し触れた「兵士の靴」。これだけをみれば軍事的、暴力的な臭いがぷんぷんします。聖書の中では、この箇所にしか用いられていない言葉で、それ以外でどのように用いられているかを参照にすることはできません。ですが、「靴」によってイメージされるものから考えてみます。靴は足に履くものです。そして、足は、聖書の中で、力関係を示唆するものとして使われることがあります。例えば「ルツ記」。外国からの移民で、夫も子どももない女性ルツは、義理の母ナオミの指示に従い、ナオミの親戚ボアズという男性が所有する畑で働いていました。ある夜、ボアズが酒に酔って眠っていたとき、ルツはボアズに近づき、気づかれないように彼の足元に横たわります。その後、ルツはボアズと結婚し、子どもを生み、それまでの苦しい生活から解放されたのでした。ここには、2 重の力関係があります。当時の中東地域の国々は、男性優位社会でした。また、イスラエルの国では、外国の人たち、聖書では「異邦人」と呼ばれる人たちは、容易に接触してはいけない存在とみなされていました。女性であり、異邦人であるルツが、自分の人生の運命を変えてくれるイスラエルの男性ボアズの足元に横たわる。二

人の間に存在する力関係が如実に表されています。もう一つ注目すべき言葉。「血にまみれた服」。ヘブライ語には「服」を表す言葉が他にもたくさんあるのですが、ここで用いられているのは、「清さ」「特別なこと」「聖なるもの」といった意味と結び付く言葉です。日本語聖書の中では「晴れ着」とも訳されています(例:創世記 45:22、ルツ記 3:3)。また、その服を着ている人がどんな人物なのか、例えば、職業や地位や立場などを表す際にも用いられます(申命記 21:13、22:17)。つまり、服を通して、それを着ている人と、その姿を見る人との間にある関係性が示されるのです。先に見た「兵士の靴」も「血にまみれた服」も、ですから、権力関係を表すものとして理解できます。そして、この箇所文脈からすると、ここで言われるのは、武力や軍事力、あるいは肉体的／物理的な強さに基づく力関係です。その靴、服が「すべて焼かれ」、「火の餌食になる」と告げられます。武力、威力、あるいは強さに基づく関係が崩れる。これまでに、当然とされていた力のあり方、その力関係に依存していた社会の構造が、なくなっていく。財力、体力、武力、軍事力、あるいは、それらによって得た地位や権力、そういったものが意味をなさなくなる。社会のあり方が抜本的に変わっていく。ここで使われている「すべて焼かれる」(セルフアー)と同じ形を持つ言葉が、イザヤ書 6 章でも使われています。6 章前半のイザヤの召命記事に登場する「セラフィム」です。イザヤに神の言葉を伝える存在であるこのセラフィムは、神殿にある祭壇から火鉢を取り、それをイザヤの口に触れさせます(6:6)。それを期に、イザヤは預言者としての歩みをなすことになったのです。「口」です。手や足など、物理的な力と結び付くような場所ではありません。「武器ではなくペンを」という表現があるように、非暴力的なイメージと結び付く「口」です。もっとも、口は、暴力となる言葉を発することもあります。言葉が人を傷つける。言葉が差別を生む。言葉が抑圧の構造を支える。言葉が更なる排除を助長する。イザヤは、セラフィムに口を触れられる前、「私は汚れた唇の者／私は汚れた唇の民の中に住んでいる」(6:5)と語っています。イザヤが生きた時代にも、やはり、言葉を武器にする人たちがいて、単にそんな人たちがいただけではなく、社会全体が、武器となった言葉に満ち溢れていたのでしょう。言葉が暴力となって、人を傷つけ、人の命を蝕んでいた。イザヤが証しする「苦難と闇、苦悩に満ちた暗黒、そして追放の暗闇」にある社会。それは、単にアッシリアという外国からの武力攻撃によってもたらされたわけではありませんでした。それより以前に、一部の人たちの力を奪い、声を消し去り、存在を否定し、差別や排除を助長する社会構造が出来上がっていたのです。そして、その構造の中で、力を有する者たちがより多くの力を得て、そうでない人たちがより多くを奪われるような、差別する側とされる側、搾取する側とされる側とに横たわる溝を、ますます大きくしていく汚れた言葉たちが蔓延っていたのです。そんな社会構造と言葉たちの犠牲となっていたのは、イザヤの預言の言葉を、もっとも遠いところで聴いていた人たちでした。いや、聴くことすら許されていなかった人たち。国家の一員とも、時に、人ともみなされていなかった存在。病を負った人。障害のある人。夫を亡くした女性。出産適

年齢期にあっても子どもがいない女性。婚姻というあり方を選択しなかった人たち。外国からの移民。今でいうところの、性的マイノリティの人たちも。その人たちの視点から見たとき、本日の御言葉によって示される、もう一つの「光」のあり方が見えてきます。武力、暴力、威力、あるいは物理的な力が決してもたらすことのない光。一時的な平穏を作り出すことがあったとしても、時がたてば以前と同じように闇を導いてしまうのとは異なる変化のあり方。

クリスマスの日に、この世に生まれた神の子イエス。「ヨハネ福音書」によれば、そのイエスは「肉となった神の言葉」です。そして、ヨハネだけではなく、マルコ・マタイ・ルカにおいても、イエスは、当時の社会に大きな動揺をもたらした人であることが証しされています。イエスがもたらしたその変化は、暴力によるものではありませんでした。武力も、軍事力も、物理的な力や強さも、すべて否定したのがイエスです。人々と出会い、寄り添い、言葉を聴き、生の命を見て、対話して語り合うなかで、その人たちの中に、その人たちが生きる地域に、また、その人たちの後に続く世代の人たちとその人たちの社会に、変化をもたらしたイエス。力ではなく、言葉によって。そんな言葉をイエスが発したのは、イエスの目の中に、心の中に、社会で声をあげることができずに、人としての命を生きることすらできない人たちの存在があったからでした。例えば、外国の女性、病や障害を負った人、嫌われた職を担っていた人、幼い子どもたち。わたしは、イエスに見いだされ、そのイエスに倣った歩みをしていくことを選択しました。だとしたら。今、できること。キリスト者として、なすべきこと。普段何気なく使っている言葉が人を傷つけることがあります。差別とは遠いところにあると思っている言葉が、人と人とを分け隔て、一方を排除することに寄与することがあります。例えば、「家族」という言葉。キリスト教では、聖なる家族「聖家族」などと言われることもあります。ついこの前のクリスマスに見た光景。一人の男性、一人の女性、その間に生まれる子ども、その家族を暖かく見守り祝福する人たち、天使たち、動物たち。生誕劇をしたところもあるでしょう。それ自体、悪いことではないけれども、でも、「聖家族」という言葉をもとに、「これこそが正しい家族のあり方だ」、「家族というあり方こそが人間の生きる正しい姿だ」という主張がなされるようになればどうでしょう。この言葉の背後で苦しむ人がいるかもしれません。結婚をしない人、できない人。子どもを持たないという選択をした人。子どもが持てない人。この世が闇になるのか、それとも光になるのか。死の陰に覆われるのか、光が差し込むのか。その差は、今、この瞬間に響く、一つ一つの言葉の積み重ねによって生み出されるものなのかもしれません。一人一人と関わり続けたイエス。彼は、そばにいる人の言葉を聴き、そして自らが、一つ一つの言葉を丁寧に紡いでいきました。その言葉を受けた人たちが、変わっていき、そして、変えていったのです。イエスに導かれた歩みを送るわたしもまた、その姿にならい、自分自身を見つめ直し、人を傷つけ排除するためではなく、人を生かし、希望を与え、すべての人を闇から解放する光の言葉を紡ぐ者でありたいと願います。皆様とともに、イエスとともに。